

和歌山の先人たち

第24回

川口 軌外

油絵に日本画の趣

川口孫太郎は、せっかく入学した和歌山県師範学校を、突然中退して上京した。明治四十五年（一九一二年）のことである。洋画の道を求めての旅立ちだった。

孫太郎の父、嘉右衛門は、たくさんの書や絵を持っていた。それを時々、床の間にかけかえ、一人茶を飲みながら眺めていたが、孫太郎もよくそばに座って、子ども心に十分わからぬままに見入っていた。小さいころから、そうした環境のなかで育った孫太郎は、当然、絵に関心を持ち、絵の批評もするくらいになっていた。

特に好きな絵は、桑山玉洲くわやまぎよくという人の描いた絵で、大小五本の竹が画面いっぱい朱で描かれていた。左半分に、むずかしい漢字がたくさん書かれていて、これは読めなかったが、まっすぐな竹の幹と朱の色が、孫太郎の心を強くとらえた。そしてまた、不思議にも思った。

「お父さん、どうしてこの竹の絵は、朱で描いてあるの？」

「ふん、そうだな。竹はもともと緑色なんだ。それを黒で描いてもおかしくないように、朱で描いてもかまわないわけだ。昔中国の蘇東坡そとうはという有名な詩人が、はじめて朱で竹を描いたということだ」

孫太郎は、わかったような、わからないような気持ちであったが、何か考えさせられ、いつまでもその絵が心に残った。

孫太郎は、明治二十五年（一八九二年）、有田郡吉備町きびで生まれた。御霊尋常小学校から田殿高等小学校を経て、和歌山県師範学校に入ったのは、明治四十二年（一九〇九年）のことである。このころ、吉備町から和歌山までの通学の乗り物がなかったので、寄宿舎に入った。

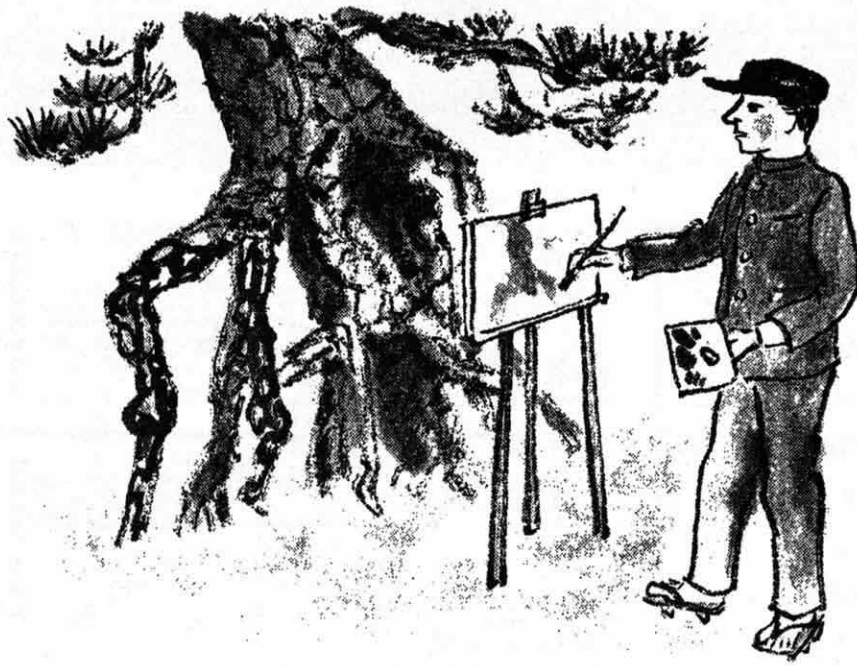
「川口、お前絵がうまいから、五月会に入らんか。絵の会だぞ」

誘われて洋画の会に入り、放課後は学校の裏の奥山に登り、根上がり松を写生したり、鐘つき堂を描いたり、一生懸命がんばった。しかし、孫太郎の絵は、普通の人は一風変わっていて、路地裏のくずれかかった土べいをわざと選んだり、黒っぽい松の幹を赤く塗ったりして描いたので、「川口、お前には、松の幹が、こんなに赤く見えるのか？」と聞かれた。

そこで、孫太郎は「日本画の朱竹を見よ。松の幹を赤く塗っても、悪いということはないよ」と言い、絵の具筆で画用紙に「人の行く裏に道あり」と書いて、寄宿舎の壁に張った。とにかく、孫太郎の描く絵は、一般の人には良いのやら悪いのやら、さっぱりわからなかった。

ある夏のことである。斎藤与里さいとうよりという画家の洋画の講習会があった。孫太郎も仲間とともにこの講習を受けて、和服を着たモデルを写生した。他の人々は、人形のように美しい顔立ちの絵を描いていたが、ひとり孫太郎だけは、だれが見ても吹き出しそうなゆがんだ顔の絵を描いた。

ところが、そこへまわってきた与里先生は、一目見るなり「やあ、これはすばらしい」と言うが早いかな、絵を高々と差し上げ、「みんな一度、この絵を見なさい。これがほんとうの絵なんだ。単なる外形の写実ではなく、ものの真をしつかり見つめ、それを率直にキャンパスにぶつつけるんだ。人



物がこちらに迫ってくるだろう。その人の奥にひそむ力を絵筆で引き寄せるんだ。モデルのうわべだけを見て描くんじゃない」と言って、またしばらく眺めていたが、もとの画架に置き、「君は何という名かね。地方には珍しい、ほんとうの絵の道歩んでいる。東京に出て、絵の勉強をした方がよいのではないか。よい研究所もあるし、立派な先生もいる。西洋の画集だって、た

やすく手に入るよ」と、孫太郎に東京行きをすすめた。

自分の絵の良さはじめて知ってくれたこの感激を忘れることができず、県師範学校をあとわずかで卒業というのに、ぶつたりと学校をやめて、東京へ出る決心をした。「人の行く裏に道あり。ぼくは普通の道を歩かないのだ」と、普通の軌道から外れるという意味をもって、雅号を「軌外」とした。

東京に出た軌外は、太平洋画研究所に入り、油絵のほかに、日本画も書もよくできた中村不折についた。子どものころから墨絵に親しんできた軌外は、ここでみっちり日本画の勉強をした。

その後、美術院洋画部の小杉未醒について学んだが、いつごろからか軌外の目は、遠く外国の絵に注がれていった。外国から入ってくる画集を見ると、マネ、モネ、シスレーなどのまばゆい印象派の絵が載せられており、またゴッホ、ゴーギャン、セザンヌなどの絵が、軌外の心をとらえてはなさなかった。さらに、ブラックやピカソがあらわれると、彼の心はもうヨーロッパに飛んでいた。

大正八年（一九一九年）、彼は東京での研究を切り上げ、ヨーロッパに旅立った。当時、ヨーロッパで絵の勉強を続けるということは、大変なことであったが、家族や親類の好意によって、長年の海外生活が支

えられた。

フランス、イタリア、スペインなどに留学、前後二回、九カ年、各地の研究所に学んだりした。異国の生活の孤独のなかから日本の美しさへの郷愁が沸きおこり、ヨーロッパで磨いた油絵の技法に日本画の趣があわさって、東西の画風がとけあった、新しい軌外独特の芸術を生み出すことに、成功したのであった。

藤原氏以来続いた公家の末孫といわれる川口家の広大な山林は、絵の具にかわってしまっただが、お金では買えない貴重な宝をフランスから持ち帰ることができた。

昭和四年（一九二九年）、帰国とともに滞欧作品を二科展に出品して「二科賞」に輝き、その後、仲間とともに独立美術協会をおこしたが、第二次世界大戦のはげしくなったころ、郷里の吉備町に帰ってきた。このころ、軌外は、絵を描きたくても絵の具が買えないため、やむなく墨をすって、絵を描いた。倉が、にわか作りの画室になった。

戦後は、国画会に入り出品したほか、県展を創設するなど活躍した。

昭和四十一年（一九六六年）、七十四歳で亡くなったが、彼の生涯は、より高い「美の追求」の日々であった。

*和歌山県発行の『和歌山の先人たち』より
抜粋